

映画『シン・ゴジラ』に見る文脈分析 —物語の内部構造と物語同士の関わり合い—

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-05-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00050890

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



映画『シン・ゴジラ』に見る文脈分析

——物語の内部構造と物語同士の関わり合い——

経済学類 4年 浅野峻祐¹

<概要>

2016年に国内で話題となった映画『シン・ゴジラ』を題材に、監督の庵野秀明氏が本作の制作に至るまでに関わった人物、作品、出来事等が作中の物語にも強く影響を及ぼしていることを分析し、「日本」「日本人」「第二次世界大戦」「原子力及び核」「東京」という現代を生きる我々にとっても重要な根底的テーマと、映画やアニメ、小説等の物語を作る文化とが寄り添って繋げてきた大きな文脈の現れとして、『シン・ゴジラ』という映画と物語内の登場人物の台詞が成立していることを立証する。また、映画という文化と我々との接点における在り方について、『シン・ゴジラ』や同年に公開された『君の名は。』等も名前を挙げ、作品側ではなく観客側の抱える問題を提起し、日本国内における映画文化の再興について述べる。

<キーワード>

シン・ゴジラ、庵野秀明

¹ asano20122020@gmail.com

<目 次>

1. 日本映画の現状
2. 映画と東京一極集中
3. 過去のゴジラ映画
4. 映画『シン・ゴジラ』監督、庵野秀明氏の来歴
5. 庵野秀明氏と岡本喜八氏
6. 『シン・ゴジラ』の世界
7. 矢口と赤坂から見る登場人物背景と作品製作者の人生観との直結
8. カヨコ・アン・パターソン
9. 最後に、映画と『シン・ゴジラ』のまとめと比較

参考文献

1. 日本映画の現状

一昨年 2016 年は日本映画界にとっては躍進の年であった。

近年の映画料金の高額化、かつての映画館で立ち見して数多くの映画を連続で見ることができた時代の終焉、量産される中高生向けの恋愛映画や漫画原作を謳いながら原作者と原作のファンを蔑ろにするような（主に稚拙な CG 演出を多用する）酷い内容の実写映画、これらの映画館に足を向ける人が減るのが当然ともいえる要素の数々によって、「映画を見ても当たりハズレがある」という刷り込みが多く、観客の思考に起きてしまい、読書をする若者の減少よろしく食わず嫌いの映画離れ現象が発生する。

映画とは商売であるから伝統的な歌舞伎等の演舞や途方もない練習時間を費やして本番に挑む本格的な演劇と同じく、多くの観客がそれを見る価値があり自ら稼いだ金銭を支払ってでも感動と余韻を体験したい、という願望やそれを満たしてくれる制作側の多くの関係者への信頼に基づいて行われる観客と作り手との取引である。すなわちそれは面白くなければ見ない、という論理にも発展することは容易に予想がつくことであり、理由はそこに観客のこれまでの人生の経験や境遇、これからの生活の展望や調子とは合致せず、本来合致されるはずという期待と安心が脅かされ、過去と未来に渡って時間的に漠然と存在している長大な肉体のような自分自身を不安にさせる要素が含まれているからである。過去に愛された経験が無ければ人は大切な誰かが死に愛が消え去る場面で泣くことはできないし、未来に明るい希望を抱いていなければどんな計算されたジョークも笑うに値しない。むしろその自分と自分が見せられている物との不合致は無感情を引き起こすのではなく、その物語や会話自体への不快感や批判時には憎悪を向けることにも繋がり、最悪の場合は個人のアイデンティティにも密接に関連しているトラウマや日頃の鬱憤が精神的に蓄積されることの限界を迎えるきっかけとなってしまい止め処なくストレスの捌け口として、作り手の意図とは関係なく、観客が普段の日常を忘れられる時間にしようと考えて世に送り出した作品がまるでゴミ箱か便所のような扱いを受けて現実の苦痛の受け皿になってしまう。また映画という文化は非常に流動的で、生まれて初めて映画を見る人とこれまで一万作品見た人が同じ映画館の隣同士で同じ作品を見ることもある。観客には素人も玄人もない。どれだけ凄い知識量の観客も死んでしまえばそれ以後の映画は見ることができないし、全く映画を知らない人でも未来の傑作映画を何度でも見られることもある。

「面白くなければ見ない」の前には「見なければ面白いかどうかも分からない」という前提が存在する。これを見るように促すのがアニメでも実写でも綺麗で迫力のあるシーンやキャラクターや俳優の顔が連続して映り大音量の音楽と共に大抵はタイトルやスタッフ、公開日が出て終わる映画の宣伝映像であるが、情報が溢れる現代社会において作品の作り手と情報発信者は別人である。映画監督が全世界の映画館を管理している訳は無いし、映画配給会社社員が全ての映画の脚本家や演出家でもない。「面白いかどうかも分からない」の部分を知るようにするために映画を見るのは映画監督や脚本家、演出家や俳優の目線の観客であり、「見なければ」の部分映画館や配給会社が CM 等で見ると支える理由は第一に、前述の作り手目線の観客への作品とその公開時期の単なる告知のためであり第二に、単なる告知だけで映画館に行くような観客ではない気分屋で繊細で尚且つ度重なるキャッチーな予告映像に押されたか、映画を見た後の知人や恋人との食事に期待しているだけの層の観客に、場合によっては一人につき 2000 円近い料金を 2 時間座って長方形の大きな光る壁を見させるために払わせることが目的である。これは公開される映画に対して見られる映画を楽しむ者のコアな層とライトな層の特徴の違いに過ぎず、決して

で大ヒット作を生む構造でもなく、昨日もニッチなジャンルの映画を選び好んで一人で見に行く誰かが居れば、今日は何処かで気ままなカップルがどの街でどんな服でどんな時間にどんな予定でどんな映画を見ようかと話し合っていて、明日は皆が映画館は行かず家でBDかDVDかネット視聴に落ち着いているかもしれない。

では、映画を取り巻くどのような構造が大ヒット作を生み出すのかというと、「面白くなければ見ない」の壁が崩壊した場合である。まるで顕微鏡を覗いて新生物でも探すように映画の面白さを追求しているヘビーユーザーと映画が偶然立ち寄った店のような感覚のライトユーザーの両方が、まだその映画作品も見ぬ人の前に立ちただかる食わず嫌いの壁を破壊して映画館に足を運ばせ観客席に座らせる力と可能性を持つ。多くの映画を見てきてその作品が従来の映画の文脈をしっかりと受け継いで来たり良い意味で裏切ってきたりすることに関係なく、コア層がこれは面白いと分析の果ての世紀の大発見のように晴れやかに宣言できた時か、偶々入店したレストランで何気なく頼んだ料理が舌の唸る程の絶品で、ライト層が思わずこれは美味いと褒めて口にしてしまうような時か、その両者の肯定的な意味で非常時となった際のまるで祭りの最中の歓声のような熱狂が、岩の間に閉じ困った神様を光の下に引きずり出すように、数年来映画館に行っていなかった人々を数万、数十万、数百万単位で動かす起爆剤となる。

2. 映画と東京一極集中

昨年の2016年を代表する日本映画には、新海誠監督作品『君の名は。』と庵野秀明監督作品『シン・ゴジラ』の二作が挙げられる。片淵須直監督作品『この世界の片隅に』も話題となったアニメ映画だが興行収入の面を考慮し、先に挙げた二作品が同年日本映画の興収上位二位以内且つ話題性があるので取り上げる。『君の名は。』は国内興収250億円という近年の邦画では飛び抜けた成績を収めたアニメ映画で、写実的でリアルな描写にこだわる新海監督とスタジオジブリのアニメーションスタッフが製作し、劇中の挿入歌や印象的な予告編が話題となり、中高生から社会人まで幅広い層の支持を受けた恋愛ファンタジー映画である。この映画で印象的だった場面が、本作の主人公格の登場人物である日本の山奥の田舎に暮らす少女と東京の新宿で生活している少年の心が寝ている間だけ入れ替わり互いに交流し仲を深めていく実にフィクションらしいシーンであるが、都市部と比べて娯楽施設やその他商業施設が少ない地方での暮らしに対して否定的な意見を持つ少女が東京都での生活を夢見る場面や、他地域への交流が無くとも東京だけで生活が完結してしまう少年が地方を襲った大災害に対して無関心で忘れてもいた場面等、現代日本の主に若い世代に見られやすい地方暮らしと都市部生活との比較やそこから生じた心理的な影響も描かれており、地方の少女は父親との確執を乗り越えるのに対し東京の少年は年上の女性との恋愛に失敗する等、暗喩的にはあるが単に経済的文化的人口的に見ても世界的に発展した大都市圏東京を礼賛する内容ではなく、東京一極集中が引き起こす東京圏の住人が東京圏以外へ無関心になる問題や、他地域に東京と並び立つ大都市が不在であるため恰も日本で最高水準の生活が可能なのが東京であるという漠然とした思い込みが地方民にも蔓延する問題等、東京と地方の両住民が抱える精神的な問題を指摘している。また新海誠監督は『君の名は。』の制作にあたり、2011年3月11日の東日本大震災を経験した日本人の記憶にあった、東京以外の地方が大災害に見舞われるという感覚が少なからず映画の内容とリンクしたことで多くの共感を得ることに拍車をかけたのではないかと自作品を分析している。また、日本総合研究所理事で内閣府政策統括官である西崎文平氏は次のように述べている。

東京圏への人口集中の程度は、国際的に見ても高い部類に属する。ただし、近畿圏の規模も大きいと、第二位の都市との対比では集中度が高いとは言えない。また、人口動態を見ても、東京圏だけでなく各地域における大都市圏への集中傾向がみられる。したがって、東京圏への人口集中は事実であるが、「東京一極集中」といえるかどうかは視点による。大都市への人口集中が成長を牽引するメカニズムとして、立地企業や個人間での緊密な知識の交流を通じ、イノベーションが促進される効果が考えられる。しかし、過去のデータに基づくマクロ的な統計分析からは、先進国において、大都市への人口集中が経済成長をもたらすという証拠はほとんど見出されていない。知識の交流を通じたイノベーションの可能性という視点からは、知識集約型サービス業の大都市への集中が重要であり、とくに、情報通信業では、まぎれもなく「東京一極集中」の状況にある。しかし、近年のわが国の域内総生産の動向をみると、東京圏の成長率が顕著に高い訳ではなく、また、東京圏において情報通信業などの寄与が一貫して高い訳でもない。国際比較によれば、東京圏は全産業の就業者の集中度との対比で、金融・保険業の集中度は低めであるが、情報通信業の集中度は高めとなっている。しかし、情報通信業では就業者の集中度に見合った付加価値の集中度が見られない。また、国内データを見ても、東京圏における情報通信業の圧倒的な就業者の集積が必ずしも生産性に十分反映されていない。イノベーションの代理関数として開業率をみると、東京圏が顕著に高いとはいえない。背景として東京圏におけるコストの高さなどが考えられる。むしろ、全産業では福岡市、札幌市、神戸市、情報通信業では名古屋市、福岡市など地方の大都市が健闘している様子が伺われる。以上のような現状を踏まえると、東京圏への人口集中を軽減することと、日本全体の成長力を強化することは、政策的にトレードオフの関係にはないとみられる。人口減少下にあつて、東京へのさらなる人口集中が生じてメリットは乏しく、むしろ労働市場の流動化や国際金融センター機能の充実などを通じ既存の人口集積をより高い付加価値に結び付けていくことが課題である」(西崎 2015, p. 3)

このことから、人口から見た東京一極集中に纏わる産業への非反映や価値発生の非効率性は東京一極集中傾向を現状よりも少しは是正することが可能な根拠として十分な説得力を持つと考えられる。東京への人的過集中は映像などでも印象的な山手線をはじめとする都内各路線車内の隙間もない満員電車によって発生する乗客へのストレス問題なども引き起こすが、ミクロな視点ではなくマクロな視点で日本の首都への一極化を捉えた時データ上でも上記で挙げられた問題が指摘され、日本国民ならば多くの人々が 21 世紀の東京に数多くの問題提起をすることは何も間違っていないと、自然な感情から発露した素朴で率直な疑問と関心の露呈であると言える。

3. 過去のゴジラ映画

『君の名は。』はアニメ映画ではあるが作中で実際に東京と地方の両面から物語を描いた作品であるが、同作品が 2016 年 8 月 26 日に全国公開されたほぼ 1 か月前の、同年 7 月 29 日に公開された実写特撮映画『シン・ゴジラ』は興行収入では 82.5 億円とヒット作ではあったが『君の名は。』の成績には及ばずとも健闘した作品である。1954 年 11 月 3 日に公開された『ゴジラ』を原作に半世紀近くに渡って続いてきたゴジラシリーズの、前作『ゴジラ FINAL WARS』以来 12 年ぶりの日本製作のゴジラ作品である。第 1 作である 1954 年版の『ゴジラ』では戦後復興し

たばかりの東京を原水爆実験の副産物として誕生した全長 50 メートルの恐竜のような形態の怪獣ゴジラが襲い、電車や国会議事堂を破壊した後、最終的にとある科学者が発明した超兵器によって科学者もろともゴジラは海中で息絶え、人類の核実験によって生み出されたゴジラが再び人類の発明によって殺されるという皮肉な結末と同時に、作中の人物がやがて第二、第三のゴジラが出現する可能性を示唆して映画は幕引きとなる。映画は 1945 年に第二次世界大戦で日本が連合国側から二度の核攻撃を受け、ポツダム宣言を受諾し敗戦してから 9 年後に公開されており、監督の本多猪四郎をはじめ映画スタッフのほとんどが戦争を経験した世代であり、映画公開同年 3 月 1 日に起きたビキニ環礁でのアメリカ軍の水素爆弾実験によって発生した多量の放射性降下物を浴びた遠洋マグロ漁船である第五福竜丸の無線長だった久保山愛吉が半年後の 9 月 23 日に死亡した事件や、1952 年に警察予備隊が改組され現在の陸上自衛隊の前身となったこと、当時の吉田茂内閣への政治的不信感が募っていたこと等の要素が含まれた反核映画、パニック映画とも分類されている。ゴジラシリーズと呼ばれるように後にシリーズ化していることから分かるように、第 1 作の『ゴジラ』は映画配給会社である東宝の当時の傾いていた経営を建て直し、観客動員数は 961 万人で当時の日本人の 10 人に 1 人が観たことになり、欧米でも高い評価を得て『東京物語』脚本家の小津安二郎や巨匠漫画家の手塚治虫、『ゲゲゲの鬼太郎』で知られる水木しげる等がこの映画を絶賛している。この『ゴジラ』を発端にして所謂怪獣映画の歴史が始まり、『モスラ』等の新しい怪獣のキャラクターや公害問題が発生した時代には工場から垂れ流された汚泥が怪獣となった『ヘドラ』が登場する等、巨大な生物が人間が作り上げた町や都会を破壊するという一種のエンターテインメント性で若年層の支持を受け、しかし単に怪獣が破壊行為を行っているのではなくその誕生経緯や社会的な位置付け等の文脈を観察すると決して子供向けの低俗な映像作品という訳でもなく、日本国と密接に関わった歴史を背負いそのまま具現化させたような、報道や人々の意識が忘れていても強烈な存在感と共に再びわが国を脅かしてくる恐怖の対象が、怪獣という概念の本来目標としたところである。ゴジラシリーズはその後、重厚なテーマを取り扱う怪獣映画の本来の目標からは軌道を逸れ始め子供向けのキャラクターとしての人気獲得に路線を変更し、ゴジラは人類と敵対する圧倒的な存在から、人類を他怪獣から守る英雄的な役割に位置づけた作品が多く作られたことが、原作である『ゴジラ』の理念を蔑ろにした安直な発想に基づく後の怪獣映画の評価を下げ怪獣そのものへの誤解を生んだ原因であり、シリーズが一新される度に原初のゴジラの反戦反核的存在且つ現在人類に警鐘を鳴らすポジションに立ち返る作品が製作されるのがゴジラシリーズの大綱的な歴史であり、1954 年の初代『ゴジラ』から 1975 年の第 15 作『メカゴジラの逆襲』までの昭和シリーズ、1984 年の第 16 作『ゴジラ』から 1995 年の第 22 作『ゴジラ vs デストロイア』までの平成シリーズもしくは VS シリーズ、1999 年の第 23 作『ゴジラ 2000 ミレニアム』から 2004 年の第 28 作『ゴジラ FINAL WARS』までのミレニアムシリーズに分類することができ、海外では米国で 1998 年の『GODZILLA』と 2014 年の『GODZILLA ゴジラ』が製作され日本でも 2010 年代の作品として挙げられるのが 2016 年の『シン・ゴジラ』と 2017 年の『ゴジラ 怪獣惑星』、2018 年公開予定の『ゴジラ 決戦起動増殖都市』である²。

4. 映画『シン・ゴジラ』監督、庵野秀明氏の来歴

² Biglobe 「ゴジラシリーズ全作品一覧」 <http://www5e.biglobe.ne.jp/~t/azuma/godzilla.htm>

『シン・ゴジラ』の監督を務めた庵野英明氏は大阪芸術大学出身のアニメーター、映画監督であり、大学在学中の自主制作活動が原因で放校処分となり東京へ就職する際、そのまま当時『風の谷のナウシカ』を制作中の宮崎駿氏のスタジオで寝泊まりしつつ、同作の最も細かく緻密な作画が求められる巨神兵のシーンの原画を担当し、その後は『劇場版 超時空要塞マクロス』、『王立宇宙軍 オネアミスの翼』、『トップをねらえ!』、『ふしぎの海のナディア』等のアニメーション作品に関わり続け、そして1995年には『新世紀エヴァンゲリオン』で一躍脚光を浴び、2000年代には『エヴァンゲリオン新劇場版』シリーズを2017年時点まで制作を続けており、2013年のスタジオジブリの宮崎駿監督作品『風立ちぬ』では主人公の声優を務める³等、作品制作に懸ける情熱は長年に渡って失ってはいない人物である。庵野氏が『シン・ゴジラ』の監督に抜擢された理由として挙げられるのが2012年の『エヴァンゲリオン新劇場版:Q』公開後、当時映画製作後に氏自身が立ち上げたアニメーションスタジオに近づけなくなるほどの鬱病に陥っていた庵野氏を、庵野氏の妻である漫画家の安野モヨコ氏が支え、平成ガメラシリーズや2006年版『日本沈没』の監督として知られる樋口信嗣氏がゴジラ映画の権利を持つ東宝株式会社からの庵野氏へのオファーに際して、新作ゴジラ映画の監督抜擢の仲介となったことであり⁴、制作初期に怪獣映画に余計な人間ドラマは不要という立場を貫いていた庵野氏に対し東宝側が提案した脚本が庵野氏の意向に合わなかったため、庵野氏自身が進退をかけて脚本を変更しなければ自分が監督をやる意味がないため降板すると東宝側に告げ、結果的に東宝側が折れる形で新作ゴジラには庵野氏の意向が多分に取り入れられることになった⁵、という経緯がある。

庵野氏の作品で特に有名なのが前述もしたアニメ作品『新世紀エヴァンゲリオン』シリーズであるが、作中の内容に触れると、物語の舞台は地球規模の大災害と世界規模の核戦争に見舞われた後の2015年の、核爆弾によって破壊された東京から幾度かの遷都を経て現在の神奈川県の芦ノ湖付近に建設された第3新東京市であり、都市地下の巨大空間に設置された国連の特殊な組織であるネルフが所有する、エヴァンゲリオンと呼ばれる巨大な人造人間型のロボット兵器に物語の主人公の碇シンジが搭乗することを周囲の人間から強制されるという展開から物語は始まり、ネルフは都市に襲来する使徒と呼ばれる人類の敵に対してエヴァンゲリオンを使った戦闘によって迎撃していき、そのパイロットである碇シンジは使徒との連戦で勝利を重ねるが14歳の少年という多感な時期も災いし、ネルフの司令官である父親や母親代わりになってくれた女性上官、

³ スタジオカラー庵野秀明公式ウェブ「庵野秀明 個人履歴」<http://www.khara.co.jp/hideakianno/>
ニコニコ大百科「庵野秀明とは（アンノヒデアキとは）[単語記事]」

<http://dic.nicovideo.jp/t/a/%E5%BA%B5%E9%87%8E%E7%A7%80%E6%98%8E>

⁴ スタジオカラー最新情報「『シン・エヴァンゲリオン劇場版』及びゴジラ新作映画に関する庵野秀明のコメント」

<http://www.khara.co.jp/2015/04/01/%E3%80%8E%E3%82%B7%E3%83%B3%E3%83%BB%E3%82%A8%E3%83%B4%E3%82%A1%E3%83%B3%E3%82%B2%E3%83%AA%E3%82%AA%E3%83%B3%E5%8A%87%E5%A0%B4%E7%89%88%E3%80%8F%E5%8F%8A%E3%81%B3%E3%82%B4%E3%82%B8%E3%83%A9%E6%96%B0-3/>

⁵ オレのゲーム速報@JIN「東宝、『シン・ゴジラ』に養みたいな人間ドラマを追加しようとして庵野監督をブチギレさせていた!!「降板する」という話にまで」<http://jin115.com/archives/52161570.html>

同じパイロットである何人かの少年少女との関係性を、ストレスやトラウマも原因となり物語が進むにつれて次第にもつれさせていき、やがて全ての使徒を倒し切るが他人との関係に絶望しその影響でパイロットの精神状態に強く影響を受けるエヴァンゲリオンは暴走していく、という決して大団円の結末とは言えない視聴した人々からは賛否両論を呼ぶものであり、他に似た作品の無い話題作となった。物語の看板でもあるエヴァンゲリオンと呼ばれる人型のロボットに想起されるように、作品放映時の1995年当時からでも過去の作品である1979年のアニメ作品『機動戦士ガンダム』や1972年の漫画作品『マジンガーZ』に代表される巨大ロボットアニメと呼ばれる分野に分類されながら、現代日本に近い送電線と鉄塔が張り巡らされた山麓や民家が点在した田園風景、電柱や電車が折り重なるように密集する都心等、リアルな背景を描いた上で、その景色の中に非現実的なロボットや怪物が現れて戦闘をするという当時としては異色なアニメーションだったと言え、主人公が敵と戦闘する際に搭乗したロボットが損傷すると機械と痛覚が連動しているために人体的に同じく該当する部分に主人公が激痛を覚え泣き叫ぶシーンや、使途から人類を守る組織の内部で嫉妬や軽蔑、不信や無関心等の感情や心境が描かれる等、作品の視聴者の心理に肉迫するような演出が数多く見られた。『風の谷のナウシカ』の流れ出る溶岩のように崩れていく巨神兵を描いた庵野氏は、アニメーションにおいて一つの場面で数多くの物体を同時に動かすことに長けていると言え、この様々な要素を可能な限り詰め込み同時進行を一点集中させる庵野氏の精巧さを目指す精神は例え絵を描くことではなくとも同一人物である限り制作する作品に対して監督として求める水準が同じであるように、『シン・ゴジラ』の脚本にも表れている。

5. 庵野秀明氏と岡本喜八氏

庵野氏の尊敬する⁶実写映画監督に2005年に81歳で没した岡本喜八氏が居り、岡本監督作品の中でも庵野氏が学生時代に幾度となく視聴した映画が1967年版の『日本のいちばん長い日』である。映画は1945年の東京、首相官邸や皇居を舞台に昭和天皇と当時の首相や閣僚達との御前会議に始まり、敗戦に向けたポツダム宣言の受諾と玉音放送成立の経緯、それを阻止するために武装蜂起した若い陸軍将校達が起こした宮中事件や戦争継続派の陸軍大臣の自害等、後の終戦記念日である8月15日正午までの24時間を描いた史実に忠実な作品である。大まかな作品の流れとして序盤では、広島と長崎への原子爆弾投下後の内閣では一億玉砕の本土作戦による日本本土に上陸してくる連合国軍を迎え撃つという戦争継続派の意見は退けられ、さらなる日本人の犠牲者が出ることを避けたいという昭和天皇の意思により、敗戦濃厚の雰囲気の中連合国軍による本土上陸作戦も迫り、一刻も早く敗戦の知らせを国民に知らせるという旨で閣僚会議が進行していくが、中盤では昭和天皇が読み上げる玉音放送の一言一句までの精査やどちらの文言を使うのがより正しいのかで閣僚同士で意見が割れる等、当初の予定より大幅に遅れて読み上げのための正文が作られていき、天皇による読み上げ完了後も音声記録したレコード盤が反乱した陸軍に狙われ、難航はしたが民主主義的な制度である会議に則った成果である玉音盤が全く民意を介していない一部勢力の過激な戦争継続強硬派によって脅かされるという、人類が長い歴史をかけて

⁶ シネマトゥデイ 『シン・ゴジラ』に岡本喜八監督が登場するワケ『日本のいちばん長い日』(1967年)』
<https://www.cinematoday.jp/news/N0086514>

作り上げた対話を用いる集団の平和的な意思決定方法に完全に背いた行為が武力により実施され、終盤では暴走する陸軍が次第に自滅していき玉音盤の破壊も達成できず最終的に8月15日正午に玉音放送は行われ、太平洋戦争で死んでいった数多くの兵士達の英霊に報いることが出来なかったとして怒りや悲嘆の感情に任せて逃げ出した若い陸軍の男達が終戦という平和が訪れた中、皇居門前で自殺するという重厚な描写を以て物語は終了する。映画ジャンルとして歴史フィクションのドラマであり、戦争を取り扱ってはいるが実際の戦場の描写は無く二度の原爆投下の様子もあくまで物語の一要因に過ぎない等、他の戦争関連の映画と比べて実在の人物が多数登場する群像劇的な面が顕著に表れ、彼らの言葉による衝突や事態を解決に向けて進めるために会議や説得を重ねる等会話劇的な比重も大きく情報量が多く、映画という限られた時間の中でそれらを進行するためにワンシーン毎の描写や会話内容が簡潔であり印象的であり、速読をしているかのようなテンポで観ることができる作品である。

故岡本喜八監督は『シン・ゴジラ』に写真のみ特別出演をしており、作中でも物語のキーパーソンとなる元大学教授の研究者である牧悟郎役で登場している。『シン・ゴジラ』の物語は牧元教授が東京湾羽田空港沖の海上でプレジャーボートから姿を消し海中転落をしたと思われ行方不明になる展開から始まる。ボート上には教授の遺留物が残され、捜索に当たっていた海上保安庁の隊員数名がボート直下の東京湾海中からの水蒸気爆発に巻き込まれ、同じく海底に敷かれた千葉県と神奈川県とを繋ぐ東京湾アクアラインのトンネル上部に亀裂が発生し侵入した海水が走行中の自動車数台を巻き込む。その事件を皮切りに海底から全長20メートルの深海鮫ラブカのような巨大な正体不明の生物が出現し東京都蒲田に上陸、品川までを巨体による周辺の建造物への衝突等により破壊した後東京湾に帰り、日本政府によりゴジラと命名され、数日後に再び神奈川県鎌倉から日本に上陸、多摩川河川敷での自衛隊のゴジラの東京侵攻を防ぐための作戦も失敗し、米軍の爆撃機による攻撃でもゴジラは殺すことが出来ず上空の爆撃機へ反撃するためにゴジラが口部と背部から放った未知の熱戦が爆撃機ごと東京都心を焼き払い、日本国首相を始め多くの官僚や民間人が命を落とす未曾有の大災害が発生することになる。作中では最終的に日本の首都に多大なる損傷を負わせたゴジラをそれ以前から研究していたのが牧元教授であり、顔写真のみ出演のその配役を『シン・ゴジラ』の脚本も担当した庵野監督が尊敬する『日本のいちばん長い日』の岡本監督の遺影から抜粋したことは、物語内部の登場人物の台詞や張られた伏線や壮大な展開をも超えた、物語を作る側に常に存在する身を縛る鎖であり先を導く命綱のような、製作者自身の人生観や価値観に直結するような、映画に限らず小説やドラマ、漫画やアニメには必ず存在する物語の色とも言える文脈というものをさらに飛躍させた、作中にはなく作品と作品、作者と作者との間に存在する時間も場所も超越し、シーンもページにも束縛されない、巨視的な文脈の存在を示す要素である。

6. 『シン・ゴジラ』の世界

また牧元教授というキャラクターは『シン・ゴジラ』の物語開始時点より以前にアメリカ合衆国でゴジラに関する研究をしていたという設定が存在し、これに関連して日本の女優である石原さとみ氏が演じる、日本人の祖母がいる日系アメリカ人の大統領特使カヨコ・アン・パターソンが映画の序盤が終了した段階で登場し、長谷川博己氏演じる本作の主人公である日本国の内閣官房副長官政務担当矢口蘭堂と接見し日本とアメリカの両国からゴジラに関する情報の共有や今後の対策のために協力していく。しかし物語の中盤でゴジラの体細胞が進化してネズミ算式にゴ

ジラが増殖し且つ二足歩行しかできない形態から有翼化し大陸間も飛翔する可能性がある」と判明し、これを受けたアメリカを筆頭とする多国籍軍が東京にて活動停止しているゴジラに向けて熱核攻撃を加えることを決定すると、カヨコは自分の祖母を不幸にした原爆の日本への三度目の投下という計画に対する日本側とアメリカ側で板挟みにされる立場を矢口に打ち明け、矢口が率いる巨大不明生物特設災害対策本部は熱核攻撃と言う手段以外によるゴジラの無力化を目標として奔走することになる。

『シン・ゴジラ』の世界観は概ね映画公開年の日本国と一致しており、自由民主党をモデルとした保守第一党と呼ばれる政党が与党であり、大杉漣氏演じる大河内総理大臣が率いる架空の内閣である大河内内閣が政権を握り、第一次安倍内閣で女性初の防衛相となった小池百合子氏をモチーフとした余貴美子氏演じる花森防衛大臣や、現職の菅官房長官を彷彿とさせる役回りの柄本明氏演じる東官房長官などの閣僚が居り、2016年の5年前である2011年には放射能に関する事故が発生し牧元教授の妻が亡くなっている等、2011年3月11日に起きた東日本大震災と福島第一原子力発電所事故が作中でも現実と同様に発生していることを暗喩する台詞が存在し、時系列で最も遠い過去として言及される第二次世界大戦前後の日本国内の様子やその後のアメリカ合衆国との関係性から分かる本作が現実の歴史とほぼ同一の時間軸上に位置づけられていること等、前提となる予備知識は学校教育の社会科等で必修になっている内容や各種マスメディアで取り上げられた政治や社会問題に関する情報を反映している傾向が強く、またゴジラという架空の生物に関連する生物学的な専門用語等も登場し同じく学校教育の理科の内容にも触れ、学術的要素を多分に含むことによる知的好奇心への刺激とサイエンスフィクションという現実には存在しないエンターテインメント性とを両立させた、綿密に構想が練られた土台が物語の基盤として成立している。

科学的知識や現実に存在する用語に支えられた脚本上に現れるキャラクターのほとんどはリアリストであり、その最たる登場人物は竹野内豊氏演じる赤坂内閣総理大臣補佐官国家安全保障担当である。主人公である矢口と並んで日本政府の中でゴジラへの対応に当たる赤坂は、『シン・ゴジラ』という物語の中で最も現実に近い観点で行動する登場人物であり、比較して矢口は『シン・ゴジラ』という物語の中の現実に則って行動する人物であると言える。キャラクターが登場する物語の世界観こそ、そのキャラクターにとって現実であり日常や世界の全てであり、例えば江戸時代が舞台の『水戸黄門』の世界に突然私たちの生きる21世紀の常識や科学技術を用いるキャラクターを登場させることは、その常識や科学技術についてはもちろん私たちは知っていて理解することはできるが、二、三百年前の日本の人々が描かれる物語にそれらが入り込むことは、タイムスリップ等のサイエンスフィクション的要素が介入しない限り、ドラマを視聴していて些かキャラクターと世界観の乖離を疎ましく感じてしまうだろうし作品としての評価や質は著しく低下していくことは避けられない。『シン・ゴジラ』の舞台は2016年の日本であり今生きる私たちの常識や科学技術との知識差はほとんど存在しないと言って良いと言え、『シン・ゴジラ』の世界と私たちの世界とは同じ時代と場所を共有しているとも言える。しかし『シン・ゴジラ』の世界と私たちの世界で決定的に異なる点がひとつ存在する。ゴジラである。ゴジラが世界に存在するか否かという点で、『シン・ゴジラ』と私たちの世界は異なる。故に同じ物語に登場するからと言って、その登場人物同士が同じ世界を共有していない場合も存在し、『シン・ゴジラ』の物語の上でその最たる比較の例が矢口と赤坂の両名の間にある世界観の隔たりである。矢口が日本へのゴジラ上陸後、他の官僚たちよりもいち早くゴジラへの対応策のために組織を編成する

等、それまで存在が確認されていなかった未知の生物の出現という劇的な変化に臨機応変に対応できていくのに対し、赤坂はゴジラ上陸後も既に存在してしまっているゴジラについては認めざるを得ないため日本政府の職務としてゴジラに関する課題に望んでいくが、劇中ではゴジラのことを一度もゴジラと呼ばない等、『シン・ゴジラ』の物語でのゴジラ出現以前の旧来の世界観から脱却することは物語の結末まで無く、矢口が積極的に活動するゴジラ出現後に必要な分野へは拒絶的な対応を繰り返す。例として物語序盤、東京湾アクアライン付近の海上に向けて民間人が撮影しネット上に投稿したスマートフォン内蔵カメラの映像に映った巨大な背ビレを確認した矢口が大河内総理にアクアライン事故原因について言及された際、海底に潜む巨大な生物が原因だと発言した後、赤坂は矢口を呼び止め、あらゆる可能性を考慮すべきだと考える矢口に対し非現実的な内容の発言は控えろと暗に釘を刺す忠告をし、ゴジラ出現が確定的になった瞬間も決して積極的にその存在を認めるのではなく、あくまで映像の情報として赤坂自身が目撃したために認めたと過ぎず、その際上記の矢口の発言を冗談と捉え、ゴジラに関する米国政府からの日本政府への接触としてカヨコが赤坂への接見を依頼した際、赤坂は接見を避け代替案としてカヨコと矢口との接見を決定しゴジラに関連する問題から距離を置き、中盤では正式名称としてゴジラという呼称が決定された際、名前などどうでもいいと大河内総理と東官房長官の前で発言、また矢口が東官房長官へゴジラが放射能を放出している事実を国民に知らせるべきだと進言した際に赤坂は同席し、ゴジラから観測された放射能の濃度では行政が動く基準値ではないと一蹴し、ゴジラの二度目の日本上陸時の陸上自衛隊による多摩川河川敷でのゴジラ迎撃作戦が失敗したと判明した後に米軍のステルス爆撃機が総理官邸も含めた範囲の東京都にてゴジラへの空爆を行うと知らされた際、赤坂はいち早く米軍への事実確認の名目で神奈川県横田基地に向かうことを決定し、対して矢口は総理官邸に残る意志だった大河内総理を官邸から退去するように説得することに協力していたが、矢口は地下へ逃げ込み赤坂は東京に居なかったことで両名ともゴジラによる東京都心への攻撃による死は回避して、中盤後半では赤坂はカヨコを通じてのゴジラの管理を日本国と米国の二カ国で行い他国は介入させないという米国からの打診に対し、その協力体制に置いて米国の軍官を日本政府側に配置することを退ける代わりに矢口が率いる巨大不明生物特設災害対策本部に米国の研究者を配置することを決定した。赤坂はゴジラが原因で発生する課題に直接的には関わろうとはせず、ゴジラという非現実的な存在への対処は矢口を含めた他人に任せ自分から動こうとはせず、常に受け身で発生した問題に対しても具体的な解決策を模索するよりも判断を他人の裁量に委ねることで、自分の政治家としてやゴジラ出現前の旧来の世界の常識人としての計画を保護しよう画策している。矢口にとってゴジラとは何としてでも打開すべき難解な課題で、赤坂にとってゴジラとは計画外の回避すべき疎ましい障害である。

7. 矢口と赤坂から見る登場人物背景と作品製作者の人生観との直結

矢口は快活ともいえ、赤坂は保守的もいえるが、『シン・ゴジラ』の脚本も務めた庵野氏は2013年公開のスタジオジブリ制作の宮崎駿氏監督アニメーション作品『風立ちぬ』にて第二次世界大戦で活躍した日本の戦闘機ゼロ戦を開発した主人公、堀越次郎の声優も務めており、作中で堀越は常に次世代の航空機を開発する夢を持ち続け最後は実現させた、情熱と冷静さを兼ね備えた人物として登場する。庵野氏と宮崎氏が作品制作の中で同一の作品に関わるのは、1984年の『風の谷のナウシカ』で庵野氏が作中の重要なシーンの作画を務め、宮崎氏が監督だった時以来、29年ぶりの協力体制であり、『風立ちぬ』制作過程で主人公堀越の声優を検討する際に、宮崎氏の

側からアニメーション作品にて重要な主人公の声優という役職を庵野氏に打診した経緯がある。宮崎氏の作品は常に空想のみの荒唐無稽な物語ではなく現実を反映し投影したものとなっているために、国内外に関わらず高い評価を得ているとも言え、その作品制作に向ける姿勢はもちろん『風立ちぬ』や他の宮崎氏作品にも受け継がれており、他でもない宮崎氏本人が快活な堀越次郎役を庵野氏に演じさせたのも、全く無意味であったとすることは難しい。庵野氏は2012年に公開された『エヴァンゲリオン新劇場版: Q』の制作後に重度の鬱病を発症し、2013年の『風立ちぬ』公開時点ではその只中にあり、その後『シン・ゴジラ』の監督に抜擢される過程で周囲の人々の説得により精神状態を回復させていきながら、脚本を書き、映画を撮影していった。庵野氏も『エヴァンゲリオン』の主人公である男子中学生、碓シンジに自己投影をしていると発言しており、現実と作品制作との距離感が非常に近い人物であり、『風立ちぬ』で演じた堀越次郎は第二次世界大戦中を生き延びた人物であり、『シン・ゴジラ』に強い影響を与えた『日本のいちばん長い日』は日本の敗戦を描く物語であり、『シン・ゴジラ』作中で主人公矢口は「先の大戦では、旧日本軍の希望的観測、机上の空論、こうあってほしいという発想などにしがみついたために、国民に300万人以上の犠牲者が出ています。根拠のない楽観は、禁物です」や「戦後は続くよ、どこまでも」⁷等の第二次世界大戦を意識した台詞が複数存在し、岡本喜八氏、宮崎駿氏、堀越次郎氏等との繋がりが『シン・ゴジラ』の矢口に集約されているとも考えられる。

矢口と赤坂の両登場人物に関して、話を戻すと、この二人の物語の中での人生観の違いが決定的に浮き彫りになって現れるのが、終盤前半に訪れる東京から動かないゴジラに対して多国籍軍が決定した熱核攻撃の是非を巡る矢口と赤坂の会話である。作中でも大きく取り上げられ映画として盛り上がりを見せる多摩川河川敷での陸上自衛隊によるゴジラ迎撃作戦は、神奈川県と東京都の境界線に流れる多摩川を戦場とした戦闘であり日本の首都である東京を守る最後の防衛線が破られ、ゴジラの神奈川県方面から東京都方面への侵攻を最終的に許してしまう結果に終わる。作中で通称タバ作戦と呼ばれるこの作戦が行われたことは、日本本土上陸を果たしたゴジラがさらにその中心地である東京の内部に侵入したことを示す象徴的な展開であり、大枠としての日本国とその内側の小枠としての東京という構造を守る二重の枠の壁をゴジラが突破したことを観客に分かりやすく明快に伝えるためのストーリーである。その後ゴジラが東京の内部を破壊し物語が後半に入ると、日本国という大枠を超えたさらに巨大な枠が現れ、それが米国をはじめとする世界という大々枠であり、今度は群体化し有翼化したゴジラがその枠の壁を内側から破壊しかねないという状況に陥り、大々枠が大枠も小枠も無視してその中心にいるゴジラを小枠ごと消し去ろうと核弾頭を用いることを決めたとも言える。しかし東京という小枠は日本という大枠の一部であり要である。それに関連して作中で登場する記者二名の会話で、ゴジラ出現に伴う自衛隊の防衛計画が関東地区に偏っており、この局面でも地方が後回しにされることを皮肉った台詞を受けて、このようなものがある。「東京の人口は1300万人強、GNPは約85兆円、日本の17%の水準だ。関東地区に広げると200兆円、40%にあたる。国家の維持を考えた戦略的判断だ。仕方ないだろ」「国を守るって大変ですね」。日本から東京圏が失われた時に実質的にどのような結果を招くか予想できる台詞であるが、作中のこの時点では東京への熱核攻撃は決まっていない。

⁷ 庵野秀明(2016)「シン・ゴジラ」『シン・ゴジラ Blu-ray 特別版 4K Ultra HD Blu-ray 同梱4枚組』 東宝株式会社

米国の主導で東京を巻き込んだゴジラへの熱核攻撃決定後、矢口は、祖国である米国が祖母を不幸にした原爆を再び日本に撃ち込むことを嘆くカヨコから内密に決まったその事実を聞き、自らが率いる巨大不明生物特設災害対策本部が進める血液凝固剤を用いたゴジラの内燃機関の暴走によるスクラム状態を狙った凍結計画も破綻する可能性に憂慮する。赤坂は、ゴジラが東京を焼き払ったと同時に死亡した大河内総理に代わって臨時総理を務めることになった平泉成氏演じる里見元農林水産大臣から国連安保理が決議した対ゴジラの多国籍軍結成と日本国も当事国としてその指揮下につくことを告げられ、東京での核兵器使用の容認に動揺する。その直後、矢口と赤坂は立川広域防災基地立川防災合同庁舎新館屋上にてゴジラと核と東京を議題に会談する。以下はそのシーンの両登場人物の台詞の抜粋⁸である。

赤坂「この先は国連の名の下に米国が巨大不明生物の処置を管轄する。戦後日本は常にかの国の属国だ」

矢口「戦後は続くよ、どこまでも。だから諦めるんですか」

赤坂「熱核兵器の直撃、数百万度の熱量に耐えられる生物はいない。確実に駆逐するなら核攻撃は正しい選択だ」

矢口「しかし、凍結手段もメドが立ちつつある状況です。再考を願えませんか」

赤坂「お前のプランにはまだ不確定要素が残ってる。それに巨大不明生物の核攻撃を容認すれば、復興時の全面的支援を世界各国から約束される。巨大不明生物を確実に処理できなければ、日本は世界の信用を失う。多国籍軍の核攻撃に頼るしかない。巨大不明生物を消した後の、日本の事までを考えるのが私の仕事だ」

矢口「今なら東京3区の被害で済みます。まだ東京の復興は可能です。核を使えばそれも難しくなります」

赤坂「既に東京の経済機能はないに等しい。円も国債も株価も暴落し続ける現状では復興どころかデフォルトの危機に晒されている。日本には、国際社会からの同情と融資が必要だ」

矢口「国の復興が最優先ですか」

赤坂「この国を、救う道は他にない。矢口、夢ではなく現実を見て考えろ」

矢口が望んでいることは、日本という大枠が東京という小枠の内部のゴジラを凍結手段で無力化することであり、赤坂が望んでいることは、米国を中心に据えた世界という大々枠が日本という大枠を飛び越えて東京という小枠の内側のゴジラを熱核攻撃で排除することである。この会話の直後の巨大不明生物特設災害対策本部の一同に対してゴジラへの熱核攻撃決定の旨を報告した際の矢口の言葉に「最後まで、この国を見捨てずにやろう」という台詞がある。赤坂もまた日本を核攻撃による東京壊滅で滅亡させようとしている訳ではなく、仮にもゴジラ消滅後の復興のことを考慮して世界から受けた東京での核使用を受諾しており、論理上は日本国を見捨ててはいない。赤坂が世界の助けを借りて日本を建て直そうとしていることに対し、矢口は日本と日本国

⁸ 庵野秀明(2016)「シン・ゴジラ」『シン・ゴジラ Blu-ray 特別版 4K Ultra HD Blu-ray 同梱4枚組』東宝株式会社

民の自力による自国の救済を目的としている。世界の介入は確かに確実にゴジラを排除しその後の援助も受けられ結果だけに着目すれば日本は世界のおかげで危機を乗り切れたことになるが、その過程では日本国という枠組みは不必要で日本国民は努力をせずに自国の問題を他力本願で世界に任せ、三度目の核でさえ受け入れ東京をさらに破壊してしまい、一つの国の中に生きているという誇りや過去から受け継いできた国民性を反映した精神というものが失われることになり、短期的にはゴジラが消え良いことに思えるが、長期的には敗戦後に米国や連合国の統治や指導の下でしか決定権が無かった数十年前と同じような状況に陥り、戦後先進国となるまで積み上げてきた国にとって重要なものが再び霧散してしまうという恐ろしい事態を招く原因になり得、矢口はこの観点から未来に渡る日本や将来の日本国民も含めて「この国」と表現し、それを「見捨てず」、巨大不明生物特設災害対策本部という日本で唯一ゴジラを無力化するための対抗策を考え続けている日本人で構成された組織が、東日本大震災時の福島第一原子力発電所事故でも活躍した高圧ポンプ車などを用いて、ゴジラを凍結させることを目指す。

8. カヨコ・アン・パタースン

矢口は日本という大枠が東京という小枠の危機を救わないと、国民の尊厳が長期的・将来的に危ぶまれ、技術や制度では解決困難な国民の全体意思に巢食う根本的な精神的問題を引き起こす可能性を憂慮し、それを未然に防ぎ且つ日本に生まれた誇りを守るために、古事記や日本書紀に登場するスサノオノミコトがヤマタノオロチを退治した時に大蛇に吞ませた酒名が語源のヤシオリ作戦遂行に邁進する。その過程で赤坂が優先した世界という大々枠か、矢口が死守したい日本という大枠を取るか、その間で揺れ動き葛藤した登場人物が日本人の血を引きつつも米国大統領特使に就くカヨコ・アン・パタースンである。カヨコは物語前半で登場した当初は米国から日本へと派遣されたエージェントとしてアボナシで矢口との対談に迫り交換条件は付けたが一歩的に牧元教授の足取りの搜索を依頼したり、その際も高圧的な態度を見せゴジラ出現で錯綜する日本側のことを全く考慮に入れていない言動をしたり、あくまで米国人として矢口達に接していたが、物語後半で東京への核攻撃が決定した後は日本人と米国人の両方の視点を持っているからこそ感じる精神的苦痛を矢口に吐露したり、牧元教授が残した水や空気があればどこでも活動できるゴジラの細胞膜の活動を抑制する極限環境微生物の分子構造図の詳細が判明し凍結作戦成功への見通しが立った際に矢口と対談し、牧元教授の遺言である「私は好きにした。君たちも好きにしろ」という言葉を受けて次の会話をする。

矢口「牧元教授はこの事態を予測していた気がする。彼は荒ぶる神の力を解放させて、試したかったのかもしれない。人間を、この国を、日本人を、核兵器の使用を含めて、どうするのか好きにしてみると」

カヨコ「そうね、あなたに好きにしてみると……けど、この国で好きを通すのは難しい」

この会話の後、凍結計画の準備のために必要な日数がもう一日必要になり、そうなると多国籍軍によるゴジラへの熱核攻撃が先行して行われてしまうため、これを回避するために日本はゴジラの情報を武器に国連安保理の一角を担う仏国に打診して、熱核攻撃の24時間の延期を願い出て仏国は受諾し、安保理の他の常任理事国である中国と露国は沈黙し、米国も仏国が日本の策に乗ったことを受けて熱核攻撃を延期するか否かで議論が割れる。その中で上官から未だに主流で

ある熱核攻撃派に逆らい矢口達が進める凍結計画に加担すれば、将来の女性大統領に成る夢が消えて無くなることを告げられたカヨコは、自分の夢を守るか、日本人の誇りを死守しようとしている矢口に付くか、葛藤の末に世界がゴジラを消滅させることよりも日本がゴジラを無力化させることに賭ける意志を固め、自分の夢を諦める。このシーンは初登場時には米国をはじめとする世界という大々枠側、すなわち日本という大枠の外側に居たカヨコという登場人物が、最終的には日本という大枠の内側に入ることを自由意志の上で自己決定した場面である。カヨコという物語上設計されたキャラクターもまた、外面と内面を兼ね備え、確かに熱核攻撃派に加担して米国連邦議会の主流を少なくとも敵対はしていない立ち位置に立つことができれば将来の女性大統領に成る夢も実現に近づくという良い結果を得られるが、その過程では自分のルーツであり自己の存在を根拠で保障してくれる家族同士の間に培われた絆とも呼べる人間関係の完成形を蔑ろにした行動を、熱核攻撃の容認という形で取ることになり、祖母を不幸にした広島・長崎への原子爆弾の投下も肯定する結果にもなる。太平洋戦争を中心にした第二次世界大戦の終結に纏わる日米関係の問題点として、原子爆弾投下の是非が日本と米国では異なり、日本は悲惨な死傷者への同情の観点から、米国ではさらなる戦争の長期化による戦死者増大を回避し強力な兵器の威力を見せ付け早期の終戦を実現するのに貢献したという観点から、それぞれ批判と容認の見解が分かれており、結果的な考察になるが、カヨコは一般的な原爆投下容認の米国人の外面で『シン・ゴジラ』本編開始時点まで生きてきたが、物語の中で祖母という家族に起因する原爆投下批判の日本人の内面が浮き彫りに成り、それまでの外面を捨てても内面を優先する行動に現れる程度に、現実主義的な脚本の中で顕著に強調された感情的な登場人物だと規定できる。しかしこの場合の感情的という語句の意味合いは一般的に用いられる否定的なイメージ、例として日常生活の些細な物事が原因で怒りの感情を露呈する人物像や、恋愛関係において交際している異性に対し特定の言動や行動を強要し相手から拒絶される反応を受けると論理性を著しく欠如させ他人との対話もままならない程に悲しみの感情を自分の満足する結果が得られるまで発露し続ける人物像等が挙げられるが、それらの感覚とは異なり、あくまで野望か家族かというどちらも人が生きていくうえで必要な内心の要素が物語の展開上トレードオフの関係で対立する結果を招いてしまい、架空の物語ではなく現実の世界に生きる私たちにも往々にして訪れる人生において重要な選択を迫られるような場面にも通じる人間の意志が自らの進路を選び取るという、過去の歴史で先人たちが獲得した自由に生きる権利の最たる象徴的心理行動を、映画という巨大スクリーンの中で登場人物の一人であるカヨコが体現し、私たちにも物語を楽しむ上で価値ある深い共感と無常の儚さを感じることができるのである。

9. 最後に、映画と『シン・ゴジラ』のまとめと比較

映画とはエンドロールが流れる結末まで喜怒哀楽に代表される様々な感情を観客にもたらし、怪獣映画だろうと恋愛映画だろうと登場人物達が物語の起承転結に巻き込まれてその都度、台詞やジェスチャーなどの身体言語を通して観客に受け入れられやすく感情移入を促していく点は共通しており、ドライブを趣味にするなら自動車の運転技術と免許が、カラオケを楽しむには歌唱力やリズム感が必要であるように、映画という文化を理解するためには観察力と文脈を読む力が観る側に備わっていないと、ドライブやカラオケが交通事故や音痴を生むように、物語への誤解と非理解を生み、映画監督を初めとする数多くのスタッフが作り上げた映画という総合芸術の完成のための過程で要した時間や労力を決して蔑ろにはしない投下労働価値説的観点を持つこ

とが、そもそものより深く大きな映画と物語の文脈を読もうとする心理的契機となり、逆に言えば結果の良し悪しを短絡的な主観で決めつけることはその後の映画鑑賞の時にも画面に映る内容と観る側の期待やバイアスとの心理的不和を引き起こし、やがて積極的な映画文化への接触そのものを避けるようになるという映画業界やそのファンにとっての悪循環が生まれ得る。野球ファンが個人であるプロ野球選手の人生やプライベートまで知ることさらにコアなファンになるのに対し、最初からその選手の活躍や所属している球団ですら知らない人にとっては野球ドームの熱狂もただの騒音に聞こえるように、観客やファンの心を繋ぎとめる楔や杭のような動機が存在しなければ如何に表面上は大歓声で盛り上がりホームランやヒットが生まれても、野球文化からの人々の離散は止まらないことと同様に、映画もまた監督の背景や他作品との繋がりを理解することをしないと二度と映画を観ることは無いというような結果を招く可能性もある。

『シン・ゴジラ』という映画の結末は矢口達が押し進めたゴジラを無力化するための凍結計画であるヤシオリ作戦の成功によって日本と東京への熱核攻撃を回避することにも成功し、世界という大々枠が介入する余地は無くなり日本という大枠内部の自浄作用の働いたような形でゴジラ出現の危機は終結する。世界に頼らず日本が自力でゴジラを封じたことで、熱核攻撃後の国際社会からの援助で日本を復興させる考えだった赤坂は、かつての日本と同じようにスクラップアンドビルドで現在の日本が立ち直ることに期待する考えに変わり、米国大統領に成ると自分の夢ではなく日本と家族との絆を矢口に託すこと決意したカヨコは、多くの犠牲者を出した責任として政治家を辞めると告げる矢口に対し慰めの言葉をかけて立ち去る。この結末は牧元教授役の岡本喜八氏の作品『日本のいちばん長い日』と比較して、同作では国家の方針としてボンダム宣言の受諾が決定したことに異議ある陸軍将校が少人数で不法な手段を用いて敗戦の回避を議論するが最後は破綻するのに対し、『シン・ゴジラ』では国連の方針であるゴジラへの熱核攻撃の決定を回避しようと官僚や学者が組織を作り協力して凍結作戦の遂行を目指し最後は目標を達成するという、個人の裁量ではなく集団のチームプレイでこそ事態の解決に繋がるというメッセージ性のある逸話のようにも見て取れる。次に偶然ほぼ同時期に劇場公開された新海誠氏の作品『君の名は。』と比較して、東京と地方でそれぞれ生活しながら精神だけが入れ替わっていた少年少女が最終的に隕石落下によって消滅する運命の街を救い数年ぶりの再会を果たすラストシーンが印象的であり、共に苦難を乗り越えた男女が過去や記憶、境遇を共有することで親密になり恋愛感情が生まれることを表現した場面であると言えるのに対し、『シン・ゴジラ』では確かに協力して支え合いゴジラという危機を共に乗り越えた矢口とカヨコという男女が登場したが、矢口は政治家としての責任に、カヨコは米国大統領特使としての立場に追われて物語の結末では二人はまた別の人生を歩んでいくことが示唆されるという、両作品共に現代日本を独自の視点で捉え現実を基底とし理想を描く物語となっており、その理想と現実の狭間で僅かに理想に傾いたのが『君の名は。』であり、僅差で現実に寄ったのが『シン・ゴジラ』であったとも結果論ではあるが規定できる。最後に宮崎駿氏が映画監督として最後の作品と位置付けた『風立ちぬ』と比較して、第二次世界大戦が終結してゼロ戦を開発した主人公は総評として特攻等により多くの若者を死に追いやったゼロ戦への情熱と病気を患っていた妻の両方とを失くし、虚しさにくれているところにかつて憧れた飛行機開発者の幻影に今後も生きていかねばならないことを諭されて物語が終わるのに対し、『シン・ゴジラ』では主人公の女性問題は描かれていないが敵か味方しか居ない政界で生き残ることや自身が押し進めてきたゴジラの無力化が成功したことへの自信を終幕まで失くすことは無かったという、脚本家の自己投影の影響を少なからず受けた主人公の

失意の有無は、2017年時点で宮崎氏 77 歳、庵野氏 57 歳という年齢差 20 歳の世代の差が生んだクリエイターとしての今後のモチベーションや作品構想への意欲等の度合いを受けて作品内部に表出した結果でもあると推測できる。

終りに、私は映画という文化の今後の永続的な繁栄とさらに増え続ける映画ファンの幸福を心から祈っている。日本映画のみならず海外発の映画にも言語の壁を超えて伝わってくる心情や感動が込められた映画が多数存在する。小説や漫画、ドラマやテレビアニメ等で活躍する数多くのクリエイターが作品を通して互いに影響し合い時には美しい共鳴のように、時には激しい衝突のように関わり合いぶつかり合いながら映画に限らず全ての物語が原点回帰と新境地を見出していくことを繰り返すことも望んでいる。私もまたクリエイターに成りたいし、そのような巨大な文脈の中で生きていきたい。その夢が叶わずとも、映画の世界に寄り添ったどこかで人生を送りたい。個人的願望になったが、この論は大衆映画文化の活性化を目的とする『シン・ゴジラ』を主軸とした文脈分析である。今後の推測の余白はまだ残っており、はっきりと語られること以外は沈黙する選択以外は残っていない。

参考文献

- 西崎文平 (2015) 「東京一極集中と経済成長 (特集 地方と東京の創生に向けて: これからの「まち・ひと・しごと」を考える)」『JRI レビュー』 6(25), pp. 2-28.
- 庵野秀明責任編集/東宝監修 (2016) 『ジ・アート・オブ・シン・ゴジラ』 グラウンドワークス.